

9月1日防災の日に併せて、私が住んでいる地域でも防災訓練が行われています。防災訓練に家族で参加し、避難場所へ移動中、娘たちに、「地震や津波が来たらみんなでここに避難するんやで。」と簡単に説明していると小学生の娘が、「でも、お父さんは肝心な時、家にいないよね。」と言われていました。確かに我々消防職員は、災害が発生すると消防署に招集され、現場対応にあたります。有事の際、家族のそばに居ることができないのが、我々消防職員なのです。

令和6年1月1日に発生した、令和6年能登半島地震に私は緊急消防援助隊兵庫県大隊として派遣されました。現場は多くの家屋が倒壊し、至る所で地割れや地滑りが発生し、目を覆いたくなるような光景が広がっていました。受援消防本部の方に話を聞く機会があり、その方は発災から1週間以上家族と会うことができず、安否が確認できるまでの時間がとても長く感じ、それが一番辛かったと仰っていました。私はその話を聞き、自分の住んでいる地域で震度7クラスの地震が発生した時、家族の安否を気にしながら、冷静に現場活動を行うことができるのかと、自問自答しました。不安を完全に排除することはできなくても、少しでも心の負担を軽減し、避難する家族の不安を和らげる方法はないのかと考えました。

その時、目に留まったのが防災マップでした。最寄りの避難所や危険区域が記載されている防災マップは、各自治体で作成され住民に配布されています。自宅にある防災マップに目を通すと、とても分かりやすく作成されていますが、これは大人向けのマップであり、子どもたちにとっては理解するのは難しいものでした。そこで、私は娘たちと一緒に我が家専用の防災マップを作ることにしました。

既存の防災マップを使用し、娘たちと散歩をしながら情報を埋めていく方法をとりました。この家は〇〇ちゃん家や、危険な箇所にはシールを自分たちで貼り、避難場所には自分の好きなキャラクターのシールを貼るなど、自由に作成しました。ルールは一つだけ、自分がいつ見てもわかるように作る。防災マップを作成する中で、大人では気づけない、子ども目線だからこそ分かる危険や情報もあるという発見にも繋がりました。また、防災マップ作成を通じて、子どもたちにも大なり小なり防災意識が生まれます。もちろん、子どもたちだけの自主防災には限界があります。しかし、自分の身は自分で守るという意識を持つきっかけになるかもしれません。

我が家専用の防災マップだけで、不安を完全に排除することはできないかもしれませんが、何も行動を起こさないより小さなことでも取り組むことが、心の負担を少しでも軽減することに繋がり、また、避難する家族の不安を和らげることにも繋がっていくと思います。

災害はいつ何時発生するか分かりません。小学校の登下校中に発生する可能性もあります。そんな最悪の事態に、ランドセルにお守り代わりに入れてある我が家専用の防災マップが、父親の代わりに子どもたちの命を守ってくれるかもしれません。